

# 高校福祉科における実習前教育プログラムの開発に関する研究 (1)

－リアリティショックに着目して－

佐野 真紀 (障害児教育講座)

**要約** 本稿では、「アクティブラーニングによる高校1年生の介護実習前教育プログラムの開発」に先立ち、先行研究の分析から論点整理を行っている。初めての実習の影響は大きいことが指摘されており、第1段階の実習でのリアリティショックも報告されている。実習生が感じているリアリティショックには利用者との間のもの、職員との間のものがあり、コミュニケーションや実践力といったことが挙げられている。しかし、これらの項目についての詳細な検討はいまだなされていない。リアリティショックの内容を詳細に検討し実習前教育プログラムを構築することが今後の課題である。

**キーワード**：高校福祉科, 介護実習, リアリティショック, コミュニケーション

## 1. はじめに

本稿の目的は、2016年度から行う共同研究「アクティブラーニングによる高校1年生の介護実習前教育プログラムの開発」に先立ち、先行研究の分析から論点整理を行うことを目的としている。

筆者はこれまで、NLP（神経言語プログラミング）をもとにした社会福祉実習教育や専門職の研修プログラムについて研究してきた（佐野2003,2004）。特に2000年代はNLPを中心としたコミュニケーショントレーニングをテーマとし、ロールプレイやディスカッションを中心としたアクティブラーニングの方法を模索してきた（佐野2006）。その後、傾聴ボランティア養成講座や自殺予防対策リスナー研修などを依頼されるようになり、短時間で一定の効果を求められることから、次第にスキル習得に終始しないコミュニケーショントレーニングの形に変化してきた。傾聴ボランティア養成や自殺予防対策リスナー研修は、カウンセリングやソーシャルワークを学んだことのない方々を対象としている上に、スキルが定着するまで時間をかけてかかわることができない。したがってこれらの研修では、意識の持ち方を変えることで双方向のコミュニケーションを実現し循環を創ることを中心に傾聴の研修を行ってきた（佐野2013,2015）。

このような経緯から、2015年夏に愛知県教育委員会が実施する10年経験者研修（教科福祉）の研修講師を依頼された。当初の依頼は「福祉科の高校1年生が最初に行う介護実習では、生徒たちが緊張して高齢者とかかわることができないことが多い。この課題のヒントになる講義をお願いしたい」とのことであった。研修では傾聴ボランティア養成講座などで行っているロールプレイを中心に行い、自分自身がほっとすることでコミュニケーションが変わることを伝えた。そして研修中の参加者とのやり取りからいくつかの課題が見えてきた。それは、普段教諭が「善かれ」と指導していることがかえって生徒の緊張を生み出している可能

性があるということ、そして高校1年生の発達段階にあるからこそその難しさが予測されることである。今後、高校1年生の実習前教育—特にコミュニケーショントレーニングについて検討していくが、本論では高校生の実習についての先行研究を概観し、課題を整理していきたい。なお、実習前教育プログラムの構築にあたっては、A高等学校の協力を得て進める予定である。

## 2. 2007年法改正と高校福祉科の現状

高等学校の教科「福祉」は1999年告示の高等学校学習指導要領に追加され、2003年入学生より専門教科として実施されてきた。今日までのこの間、2007年の社会福祉士介護福祉士法改正に伴い、2009年の新学習指導要領によってカリキュラム全体が見直され、2013年入学生より学年進行に伴って順次実施されている。2009年の改訂では、科目名や時間数が大きく変更されたことに加え、教員要件、実習施設、機器・模型、時間割、実習計画等も含めた教育の内容について、養成施設校と同等の水準が求められることとなった。特に授業科目・時間数に関しては、専門教育で34単位（1,190時間）から52単位（1,820時間）へ単位増となり、実習は4単位（210時間）から13単位（455時間）へと3倍増となった。そのため、介護実習は夏休みなどの長期休暇を利用して実施しているのが現状である。

研究協力校であるA高等学校では、第1段階の介護実習を1年生の夏休みに、第2段階を2年生の夏休みに、第3段階を3年生の夏休みにしている。他の多くの学校でも同様のスケジュールであると思われるが、実習時間が大幅に増えたことにより、1年生の早い段階から実習に出ることとなっている。第1段階の実習は、障害者関係の事業所・施設に12日間、居宅サービス事業所に4日間の実習を行っている。実習内容は作業補助や利用者とのコミュニケーションが中心である。

この実習に向けて、4月から週1時間の介護総合演習において実習前指導を行っている。1回50分15回の授業の中で、実習施設のオリエンテーション、マナー、記録の書き方、コミュニケーション等について指導している。中でも時間を割いているのが記録の書き方とのことであった。5月の連休にはボランティア活動を体験することになっており、実習前指導の一つと位置付けられている。

入学してから実習までの時間が少なく、他の福祉関連教科の学習も始まったばかりで知識も少なく、実習までにやらなければならないことが多い。このことも、高校福祉科の生徒のハードルになっていることが推測される。

### 3. 高校において介護福祉士養成を行うことの意義と課題

現在、教科「福祉」を教育課程に位置付けている学校は、介護福祉士受験可能校、訪問介護員資格取得可能校、教科「福祉」実施校などがある。田村（2008）は高校福祉科教育に関する研究を概観する中で、教科福祉は単なるマンパワーの養成のために誕生したのではないことを指摘している。その目的として、第一にすべての子ども・青年の国民的教養としての福祉教育であったこと、第二に未来の福祉社会を担う専門的職業人を養成すること、第三に社会福祉系高等教育機関への接続を企図して設置された教科であったことが挙げられている<sup>1</sup>。しかしながら、2007年の社会福祉士及び介護福祉士法改正に先立って設置された「これからの福祉人材の在り方を検討する審議会」では、高校福祉科「排除論」と「擁護論」が出されて激しい議論が交わされ、まとめは両論併記された<sup>2</sup>。介護の高度化をめぐって全体の養成課程が見直される中、介護福祉士養成を行う高校は養成指定校と同様の教育時間を求められるようになり、より専門性が求められるようになった。

ところで高校福祉科での学びは、生徒たちにどのような効果をもたらしているのだろうか。萩原・名川（2008）は、福祉科高校生と普通科高校生の高齢者イメージの比較と、実習前後のイメージの変化と自己評価の関連について検討している<sup>3</sup>。基本的なイメージ構造は普通科も福祉科も違いはないものの、普通科がやや否定的なイメージを持ち、福祉科はやや肯定的なイメージをもっている。普通科は3年間の変化はほとんど見られないが、福祉科では3年間で変化が見られている。とりわけ1年から2年次の変化が大きく、実習前後の変化については2年生の実習前後でイメージ得点の変化が見られ、3年生ではイメージ得点の変化が見られていない。さらに、実習自己評価表の評価得点と高齢者イメージ得点のかかわりでは、利用者理解

の評価点の高群は、低群と比べるとイメージ得点は高かった。利用者理解が深まれば、高齢者イメージは肯定的になるということが示唆されている<sup>4</sup>。以上のことから、それぞれの学年で行われる施設実習は各々の目的があり重要であるが、2年生の初めての実習の影響が大きいことが指摘されている。現実に向き合うことで得られる学びが大きいようである。

一方、高校生が専門学校生・短大生・大学生と同様の実習を行うことの課題もある。日比（2013）は、高校における介護福祉士養成について、実習を受け入れる施設職員の負担感のアンケート調査を行い、高校生と専門学校・短大・大学の学生との違いについて検討している。それによると、高校生への実習指導の負担感は大学生・短大生・専門学校生よりも重く、高校生は考察力、技術面、体力面での差、幼さや社会経験不足による負担感が指摘されている。その一方で、移乗介助、食事介助などの実習内容を個別に見ると、負担感に年齢や学齢は影響しないという結果となっている。これについて日比は、統計分析結果は高校生への指導負担は重いと示しているが、すべての高校生に当てはまるわけではなく、個人差があり、高校生であっても意欲を高く持ち個性等を考慮した学校での準備を十分行えば、養成指定校の実習生と同じように施設での指導ができると考察している<sup>5</sup>。

新養成カリキュラムにおいて、高校生の実習時間は養成指定校と同様の455時間が適用されたが、高校生と専門学校・短大・大学の学生では発達段階も学習段階も異なっており、同様の内容を学習するとはいえ、指導については配慮が必要であろう。とりわけ最初の実習の影響は大きいことが指摘されていることから、高校1年生の実習前指導では生徒の幼さや社会経験不足を補い、15歳～16歳がもつ特性を生かす工夫が必要となるであろう。

### 4. 介護実習におけるリアリティショック

10年経験者研修でテーマとなっていた「高校1年生の実習では生徒が緊張してしまって高齢者とうまくかかわれない」という現象は、どのように主題化されるだろうか。先行研究においては、こうした現象についてリアリティショックとしてとらえて調査研究がされてきている。リアリティショックとは、人生やキャリアの移行期において、新たな現実には戸惑ったり、驚いたり、がっかりしたりすることを指す<sup>6</sup>。このテーマは、経営学の分野において従業員の自発的な離職行動の研究として積み重ねられてきているが<sup>7</sup>、今日では看護師、教員、保育者、大学生のリアリティショックについても研究が進められており、特に看護分野では多くの看護管理者が注目しており、研究が重ねられてきている<sup>8</sup>。介護福祉士養成に関しては、上田、伊藤

らの研究がみられる。ここでは、これらの先行研究を概観し、リアリティショックの内容やこれまでの議論について明らかにしたい。

上田（2005）は、第1段階の実習を終了した短大1年生のうち、調査協力の依頼に同意した学生を対象にインタビュー調査を行い、リアリティショックの様相について検討している。学生が語ったリアリティショックの内容は、利用者との関わりにおける戸惑い・ショックでは「無力感」「邪魔扱い」「コミュニケーション力不足」が多く挙げられ、介護者との関わりにおいては「実力不足」や「礼儀作法」についての指摘が多く挙げられていた。この調査では、利用者との関係において語られたリアリティショックの方が介護者とのものよりも数の上では上回っている。入学動機としての「手助けしたい」「うれしそうな顔が見たい」という信条から、学生が思い描いていたものとは異なる現実として自分の「無力感」を強く感じていると指摘している。その一方で、利用者からの「感謝・励まし」を最も多く感じていたことは、「何か役に立つ」ことで感謝されるのを期待しているのであり、「無力感」を感じつつもなんとか実習を乗り切る支えになっていたと考察している<sup>9</sup>。

伊藤（2007）は、4年制大学の介護福祉士養成課程において介護実習Ⅰを実施した2年生のうち、調査への参加を表明した者を対象としてグループインタビューを行っている。伊藤は、看護学分野ではバーンアウト研究においてリアリティショック概念を用いていることを指摘し、リアリティショックの教育効果に注目して検討している。実習中に感じた違和感についての質問では、「施設内の人間関係」「自分の感覚とのずれ」「ケアのやり方など」が挙げられており、実習でつらかったこととしては「実習生としての立ち位置をどう定めたらよいか」「実践力不足」（直接介護の技術よりはコミュニケーション能力）が挙げられている。実習を短い言葉で表現すると何になるかとの問いでは、「自分と向き合うこと」「コミュニケーション」「介護職員に関すること」「学び」「感謝」が挙げられており、実習経験が自らと向き合う契機になった様子がうかがえるとしている。伊藤は、学生は利用者と直接関わる時間が職員と関わる時間より長いにもかかわらず、リアリティショックとして表出する内容には職員が関連する内容の方が多いことを明らかにしている。学生たちは職員の言動から受ける影響が大きく、職員を通じて状況を理解し、考え、その結果多くの職員経由のリアリティショックを受けていると考察している。職員の行うケアは時として実習生が抱く理想像とのギャップを生み出すが、そうした経験にショックを受けつつもそれらを消化し、実習期間をクリアすることによって自己評価が向上したり、介護という職に対するマイナスイメージがプラスに転じたりする効果

も指摘されている。こうしたことから、回避したり軽減したりすることだけを目的とした方向でなく、より効果的な学習を行うための『手段』として活用し、自分自身の考え方の傾向や価値観と向き合う学習を積み上げることを提案している<sup>10</sup>。

上記二つの研究は、短大、4年制大学の学生を対象にしたものであるが、田中（2008）は高校福祉科の卒業生を対象に、卒業年度によるコーホート設定をし、高校時代の現場実習を振り返り評価を行う中でリアリティショックについても言及している。実習困難と感じられた項目としては、多い順に「利用者に拒否されたときの対応」「利用者とのコミュニケーション」「認知症の人への対応」「記録を書く」「排せつ介助への戸惑い」（上位5件）という結果であった。また、実習を通しての学びについては、良かったこととして「介護現場への理解が進んだ」「将来の進路決定のきっかけになった」「自分の知識や技術のレベルを確認できた」「日常生活支援について学べた」「実習をやり遂げた充実感があった」などが上位5件の回答として挙げられている。高校時代の実習の評価については、「大変良かった」「ある程度良かった」を合わせると9割以上が実習を評価している。学校で習ったことと現場実習の違いは大きかったものの、実習体験を通して施設や利用者からの学びは大きかったことがうかがえる<sup>11</sup>。ただしこの調査では高校福祉科を卒業して介護職に就いている者を対象としているため、リアリティショックによってドロップアウトした生徒は含まれていないことを考慮しなければならない。

これらの研究は、研究目的や調査対象者の学校種別、学年も異なるため単純に比較することはできないが、リアリティショックの内容として語られていることがらには共通するものも見受けられる。リアリティショックは利用者との間のもの、職員との間のものがあり、コミュニケーション、実践力などの実習生側の要因とともに、職員の実践そのものについてのショックも多いようである。しかし、これらの研究はリアリティショックの様相について明らかにすることを目的とする研究であるため、一つ一つの項目についての検討はされていない。たとえば、「コミュニケーション」が意味する範囲は広く、コミュニケーションの何につまづきを感じているのかが見えてこない。これらの結果を教育プログラムに反映させるためには、さらに詳細な検討が必要であると思われる。

## 5. 実習の経験と福祉従事者確保の課題

さて、こうしたリアリティショックは実習指導上の課題として解決すればよいのであろうか。岡本（2015）は、新人看護師のリアリティショックに関する研究の中で、看護学実習時に情緒的消耗感が高い人は、就職

後の看護の実践に関するギャップを敏感にとらえる可能性があることを指摘している。また、看護実践に関するギャップは時期の推移とともに減少していくが、臨床での実践経験がない場合その不安は継続され、看護実践能力のギャップの認知に変化がなく、職場適応にネガティブな影響を与え続ける可能性があるとしている<sup>12</sup>。実習での体験が未消化のままであると、将来介護職を選択しない、もしくは選択したとしてもバーンアウトしてしまう可能性が高くなるとすれば、実習指導においてリアリティショックを解消する指導が必要となるであろう。

また、事前学習においてリアリティショックを回避する取り組みも求められてくるであろう。小川(2005)は若年者の離職行動に関する研究の中で、求職者と採用者双方の意識と行動について次のように言及している。入社前で職業経験が浅く「認知領域の拡大」(自己の職業的な能力適正や興味に関する知識と、仕事内容、職務の遂行方法、あるいは会社のあり方についての知識を獲得・増大させていく過程)が未熟な個人は、会社の醸し出すイメージに依存して入社意思決定を行っている。その一方で会社は、採用プロセスにおける印象管理によって、求職者に対し根拠のない漠然とした期待感を抱かせ、人材を取り込もうとする。このようなリアリティショックについては、RJP (Realistic Job Preview: 現実的な職務情報の事前提供)によってその効果を弱めることが可能であることが実証されている<sup>13</sup>。このことは社会福祉従事者を養成する機関すべてに当てはまることかもしれない。入学する際に養成校は福祉職の魅力強調するが、生きるということはきれいごとでは済まされないことが多く、実習生はその現実に向き合わなくてはならない。また、実際に実習を行う施設は理想を体現しているわけではない。理想を思い描いて入学してきた高校生が、入学から3~4か月後には実習に出る。この3か月間にどのようなオリエンテーションをすればよいか、工夫する必要があるだろう。

## 6. おわりに一まとめにかえて

先行研究を分析した結果、次のようなことが言える。高校福祉科での第1段階の実習は入学してから3~4か月後に行われるため、準備期間が短く、それまでにやらなければならないことも多い。しかも、初めての実習の影響は大きく、生徒の高齢者イメージを左右する。実習において経験される驚きや戸惑い、がっかりすることはリアリティショックととらえられる。実習生が感じているリアリティショックには利用者との間のもの、職員との間ものがあり、コミュニケーションや実践力といったことが挙げられている。こうした困難さは多くの実習生が感じているものと推

測できる。また、実習時に情緒的消耗感を感じている者は就職後バーンアウトにつながる可能性があるとの指摘もあるが、その一方でリアリティショックをうけつつもそれらを消化し、実習期間をクリアすることによって自己評価が向上したり介護に対するプラスイメージが持たれることから、より効果的な学習の手段として活用することも提案されている。リアリティショックを回避する取り組みとしては、RJPによって効果を弱めることが可能であるとの研究もあることから、事前指導においてどのように現実に向き合えるよう方向づけるかが課題となるであろう。また、高校生は養成指定校の学生に比べて、考察力、技術面、体力面で差があり、幼さや社会経験不足も指摘されているが、個々の生徒の意欲や個性を考慮することで、養成指定校の学生と同じように施設での指導ができると推測されている。

先行研究においては以上のようなことが指摘されているが、これらのことから次の2点が指摘できる。第1にリアリティショックを回避する事前指導として、現実に向き合うこと、一人一人の意欲をひき出す指導を行うこと、コミュニケーションのあり方について取り扱うこと。第2に、実習での体験を消化し、リアリティショックを教育に生かす取り組みとして事後指導を行うこと。これらのことがリアリティショックを解消する取り組みとなる可能性がある。一方で、リアリティショックの内容の詳細についての分析はまだなされていない。実習前教育プログラムを構築するに際して、高校生が感じている困難さをより詳しく理解する必要があると思われる。この分析を行い、高校生のニーズに合わせたプログラムを構築することが今後の課題である。

## 註

- 1 田村真広 (2008)「高校福祉科教育に関する研究の課題と展望」日本福祉教育・ボランティア学習学会年報13,P15.
- 2 「排除論」からは、認知症やターミナルケアへの対応、介護記録の記述能力、学歴に応ずる待遇向上の観点から、18歳での介護福祉士の「未熟さ」が強調された。「擁護論」からは、高校福祉科の介護福祉士国家試験での平均以上の合格率、卒業後の進路は就職・進学いずれの場合も福祉分野が多数を占めており、福祉人材の供給源となっていることが示された。田村真広 (2008) 前掲書,PP15-16.
- 3 この研究は法改正以前に行われており、高校2年生で初めての实習に行っている点が現在のカリキュラムと異なる。
- 4 萩原明子,名川勝 (2008)「福祉科高校生の高齢者イメージに与える社会福祉現場実習の効果」社会福祉

- 学第49巻第1号,日本社会福祉学会,P109
- <sup>5</sup> 日比眞一 (2013)「高校における介護福祉士養成のあり方に関する研究」熊本学園大学大学院社会福祉学研究科博士論文
- <sup>6</sup> 神戸大学大学院経営学研究室 編 (1999)『経営学大辞典 第2版』中央経済社,P924.
- <sup>7</sup> 小川憲彦 (2005)「リアリティ・ショックが若年者の就業意識に及ぼす影響」経営行動科学第18巻第1号,経営行動科学学会,PP31-44.
- <sup>8</sup> 特に看護学の分野ではKramer (1974) が新卒の看護師が働き始めてぶつかる困難をリアリティショックとして取り上げ,多くの看護管理者が注目してきた。  
後藤桂子,松谷美和子 他 (2007)「新人看護師のリアリティショックを和らげるための看護基礎教育プログラム:実践研究文献レビュー」聖路加看護学会誌 Vol.11No.1,PP100-108.
- <sup>9</sup> 上田智子 (2005)「介護学生のリアリティーショックの様相」岡崎女子短期大学紀要38号,PP35-43.
- <sup>10</sup> 伊藤健次 (2007)「介護実習におけるリアリティショック—その様相と肯定的側面について—」山梨県立大学人間福祉学部紀要 Vol.2,PP11-18.
- <sup>11</sup> 田中泰恵 (2008)「現場実習における困難と実習からの学び—高校福祉科卒業生のライフコースアンケ

ート調査から—」日本福祉教育・ボランティア学習学会年報13,PP25-34.

- <sup>12</sup> 岡本響子 (2015)「新人看護師のリアリティショックに関する研究」広島大学大学院総合科学研究科博士論文

- <sup>13</sup> 小川憲彦 (2005), 前掲書,P33

## 参考文献

- 佐野真紀 (2003)「ソーシャルワークのかかわり技法にNLP (神経言語プログラミング) がもたらすもの—ラポールの理解と修得を中心に—」『社会福祉援助活動のパラダイム』 pp.125-142,
- 佐野真紀 (2004)「ソーシャルワークトレーニングの方向性について—社会福祉現場実習における学生の困難場面の分析から—」障害者教育・福祉学研究第1巻,pp.27-33,
- 佐野真紀 (2013)「コミュニケーションの説明モデルとコミュニケーション技術 (スキル) に関する一考察—うなずきのワークを参考にして—」障害者教育・福祉学研究 9号,pp.39-44,
- 佐野真紀 (2015)「傾聴するボランティアが持つ課題についての一考察—「聴くこと」の意味をめぐって—」障害者教育・福祉学研究11号,pp.39-44,